ONE PIECE　我が正義の為

天空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　我が正義の為

【Ｎコード】
Ｎ１０３６Ｓ

【作者名】
天空

【あらすじ】
ある日、突然、まずい果物を食べてＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界へ

彼はなにを守り、何を倒すのか？
それは正義なのか？それとも悪なのか？
そして自分の正義を貫けるのか？
そんな男の物語

プロローグ（前書き）

久しぶりに書きました
ネギま小説も考案中ですが、書ける兆しがありません・・・
またテンションで書いた作品なので
すぐ止まるかもしれません
それでも読んでくれたらうれしいです

プロローグ

――――俺の財宝か？
ほしけりゃくれてやるぜ・・・
探してみろ
この世のすべてを
そこに置いてきた――――

ひとは何を求め、海に出るのか？
そんな世界に本来、ない石が落ちた
そこから広がる波紋は世界をどう写し変わるのか？

チュンチュン

俺は起き上がり、時間を確認すると、時刻は９：３０を指していた
俺は急ぎ、服を着替え、テーブルから適当な果物を取り、
家を飛び出した。

俺は学校に向かう、途中持っていた果物に食いついた。
口に広がるのは、カオス、この世の物とは、思えない味、
腐ってるおもい、手に持つ果物を見るが、腐っている様子はなく、
午前に体育があるので、それの攻略を始めた

果物を何とか食べきり、口を漱ぐ為、近くの公園に、
足を向けた途端に突然の浮遊感に襲われ、
気がつくと俺は空を飛んでいた

主人公設定

名前：天空（あまつそら）
年齢：１８
身長：１７６
誕生日：三月十九日
出身：日本
夢：自分の正義を貫き徹す事
好きな食べ物：グラタン、お好み焼き
好きな島：春島の秋
イメージ動物：オオカミ
イメージナンバー：００
イメージカラー：空色
イメージマーク：後ろの骨が刀と銃に、ドクロの左右に楯
イメージ国：スイス
イメージの花（ロビン談）：ブローディア
家族に例えると：五男
ニオイ：太陽のニオイ
弱点：幽霊、虫

ここから下はネタバレ

所属：麦わら海賊団
異名：百鬼夜行のソラ
悪魔の実：ブキブキの実
懸賞金：８０００万ベリー
能力：手が触れた物の情報を読み取る
　物の情報があれば創り出せる
　構造が分かればオリジナルも創れる

日本では、一人暮らし。両親とは死別
基本、楽天的だからルフィやウソップとは仲がいいが、
身内に手をがしたら、相手を完膚なきまでに倒す

髪は透き通る空色で腰まで伸びている普段は襟足でまとめている

未来の海賊王と海軍将校

――――ルフィｓｉｄｅ――――

ルフィ「ゴムゴムの銃（ピストル）・・・」

アルビダ「！！！？？」

おれはアルビダをぶっ飛ばした

手下達ががアルビダの元へ

アルビダの手下「・・・・・・・・・・・！！！

手が・・・・

手が伸びたぞ！！」

アルビダの手下「お頭！！！

アルビダ様が負けた！！！

化け物だ！！」

ルフィ「コビーにいっせｋ「そこの人どいてくれ」

声がの聞こえる方を向き

『ばいいーん』

『どさ』

おれの頭に当たった感覚と何か落ちる音

ルフィ「なんだなんだ？何かに当たったぞ？」

コビー「ルフィさんルフィさん

空から人が降ってきて、ルフィさんに、

あたったんですよ！！！

ほら、あそこに」

おれは、コビーが指を指す方向を向くと、そこに男がいた。

ルフィ「お前、だれだ」

――――ソラｓｉｄｅ――――

空に着てから１０分。
俺はまだ空からのノーパラシュートスカイダイビングの真っ最中。
米粒ほどの大きさだった島が、大分、大きくなっり。
このまま、落ちると死ぬなと、人生を振り返っていると。

ルフィ「ゴムゴムの銃（ピストル）・・・」

下を見ると麦わら帽子をかぶった男が、
太った女性を吹き飛ばして、いる。
よく見ると俺の落下地点に男が居ることに気づき
慌てて、注意をした

ルフィ「コビーにいっせｋ／ソラ「そこの人どいてくれ」

注意も空しく男に当たると
『ばいいーん』
なにかに、弾かれる感覚とまた浮遊感し襲われ
『どさ』
俺は自慢に落下した

ルフィ「なんだなんだ？何かに当たったぞ？」
コビー「ルフィさんルフィさん
空から人が降ってきて、ルフィさんに、
あたったんですよ！！！
ほら、あそこに」

俺は声のする方へと振り向き、
そこに俺にぶつかった男と小さい少年がいた

ルフィ「お前、だれだ。
何で、空から降ってきた」
ソラ「ありがとう
俺はソラ
天空（アマツソラ）だ」

麦わらの男はそういうと、手を差し出してきた
俺はその手を取っり、立ち上がる

コビー「なにしてるんですか。
ルフィさん、危険な人かもしれませんよ」
ルフィ「大丈夫だよ
こいつは悪い奴じゃねえ。
ぶつかる前に、注意してくれたからな」
コビー「ですが・・・」

ソラ「話の途中、すまないが、
お前らの名前は？」

ルフィ「おれの名はルフィ
モンキー・D・ルフィ
そしてこのちっこいのはコビーってんだ
よろしくな」
ソラ「じゃあ、ルフィ
ここはどこだ？俺は公園に向かっていたんだが・・・
気づいたら、空にいた。」
コビー「ここは、東の海（イーストブルー）にある島のひとつです。」
ソラ「東の海（イーストブルー）？
聞いたことないな・・・」
コビー「えっ、東の海（イーストブルー）を知らないんですか！！
この世界の常識ですよ！！！」
ルフィ「じゃあ、お前はどこから来たんだ？」
ソラ「お前らの話が正しいなら、
俺は異世界から来たことになるな」
ルフィがスゲーキラキラした目で俺を見て

ルフィ「異世界人」
ソラ「あぁ、俺の世界にそんな名前の場所はねぇ。
それに、そこの海賊旗、もう俺の世界には
海賊旗を掲げる海賊はいねぇ」
ルフィ「そうか、お前の世界には海賊はいないのか。
海賊は楽しいぞ。
海賊は自由だ。それに歌も歌うんだぞ。
そうだ、お前、おれの仲間にならないか？
異世界人なんておもしれし
ししししし」

この世界の事はなにも知らねぇ
海賊は危険だが知らない土地で一人でいるよりましだ

ソラ「海賊か
俺は強くないぞ
それでもいいのか？」
ルフィ「いいぞ
初めての仲間だ
ししししし」
コビー「そんなに、簡単に決めていいですか
海賊になるって事は海軍に、
追われるって事ですよ
それより、一緒に海軍に、入りませんか？」
ルフィ「コビー、おれの仲間を取るな」

ルフィがコビーに襲い掛かっていった

ソラ「ルフィ、待てよ。
コビー、悪いが海軍に入る気はねぇよ。
俺は、自由に生きたい。
俺はルフィと共に行く」

ルフィの肩を抱いた

ルフィ「よし、そうと決まれば
この島を脱出しよう
お前ら、コビーに小船をやれ
あれ、あいつらいなくんなってるぞ」
コビー「僕達が話してる間に、
逃げられましたね・・・」
ソラ「どうするよ、船がなくちゃ
海に出られないぜ」

コビー「たしか、倉庫の中に予備の小船があったはずです」

宝庫の中を覗くと布を被る小船があった
俺達は小船を海に運び、
倉庫に食料が無いか、漁っていると、ふとナイフが目に入り、
手に持って、見ると
『両刃の鉄のナイフ
材質は鉄
刃渡り２０ｃｍ
厚さ８ｍｍ
重さ３００ｇ
新品同様
両刃なので切るよりも突く方が効果的』
頭に変な情報が流れてきた。

ルフィ「ソラ、どうした。
ナイフ持ってぼーっとして」
ソラ「いや、ナイフを持ったら、
頭にナイフの情報が流れて」
コビー「ソ、ソ、ソ、ソラさん、悪魔の実でも、
食べたんですか」
ソラ「悪魔の実って、何だ？」
コビー「悪魔の実とは
食べると特殊な能力がつきますが
変わりに海に入ると力が抜けカナズチになります」
ルフィ「ちなみに、
おれはゴムゴムの実を食った。
ゴム人間だ」
ソラ「だから、俺が落ちたとき、
当たっても、大丈夫だったんでな。

でも、こっち来て食べ物なんて、食ってねぇぞ」
コビー「それもそうですが。
でも、能力はありますから・・・
どこかで、食べたに、ちがいありません」

今日は寝坊して、急いで支度し、果物を持って、
家を飛び出し、途中で果物を食べｔ！！果物！！！

ソラ「ここに来る前に、くそまずい果物を食った」
ルフィ「それだ、悪魔の実は、すっごくマズイ」
ソラ「あれが、そうっだったのか・・・
なんで俺の世界にあるんだ、悪魔の実」
コビー「それより、ソラさんの食べた実は、
何の能力でしょうか」
ソラ「ナイフの情報が分かったから分析能力か」

俺はナイフの情報を頭に浮かべ、地面に手を置くと。
手から光が溢れ、光がナイフの形状になり、
光が収まると手の中にナイフが握られていた

ルフィ「すっげ
手がピカってなったら、
ナイフが出てきたぞ」
コビー「ソラさん、何したんですか」
ソラ「いや、ナイフの情報を思い浮かべて
手を地面に置いたら、
出てきた。
どうやら、俺の能力は、
武器に触れると情報が見れ、
情報を元に武器を創る

能力のようだ」
ルフィ「けっこう、強そうな
能力だな」
ソラ「いや、微妙だ」
コビー「なんで、ですか
武器を創るなんて
強いじゃないですか」
ソラ「能力は強いんでが・・・
俺に、武器を使う技能がない。
最適な使い方は分かるんだが、
をれをする、基礎がなからな・・・」
ルフィ「これから、鍛えればいいじゃねぇか」
ソラ「それもそうだな
早く、食べ物、探して、
次の島にいこうぜ」
ルフィ「そうだな」

倉庫を隈なく探すと数日分に食料をみつけ、
船に積み込み、次に島へ船を出した

未来の大剣豪（前書き）

ルフィの一人称がかけねぇよ
ある程度、話が出来たら、肉付けして
再アップ予定　何時になるかは分からんが・・・

未来の大剣豪

――――ソラｓｉｄｅ――――

船に乗り数分

コビー「お二人が、悪魔の実を
食べただなんて、驚きました
でも・・・ルフィさん【ワンピース】を
目指すってことは・・・あの
【偉大なる航路(グランドライン)】へ
入るって事ですよね・・・！！」

ルフィ「ああ」

ソラ「なんだ、その
【ワンピース】と
【偉大なる航路(グランドライン)】
てのは」

ルフィ「【ワンピース】はな
海賊王が残したすげー宝で
手にいれると海賊王になる
偉大なる航路(グランドライン)】てのは
スゲー海で最後までいくと
【ワンピース】がある」

コビー「ルフィさん、その説明では、分からないと
思います・・・
まず、【ワンピース】とは、
【海賊王ゴールド・ロジャー】が、
見つけた。宝といわれています。
見つけた物はこの世を統べると

伝えられています。
【偉大なる航路(グランドライン)】は
海賊の墓場と言われ、
唯一【海賊王ゴールド・ロジャー】だけが、
制覇した海です。
ルフィさん、本当にそんな海に行くんですか」
ルフィ「うん、だから強い仲間が要るんだ」
ソラ「悪かったな
強くなくって」
ルフィ「別にお前が弱いって言ってないだろ
コビー、これから行く、海軍基地に
捕まってるって奴」
コビー「ああ・・・ロロノア・ゾロですか？」
ルフィ「いい奴だったら
仲間にしようと思って！」
コビー「えーーーーっ！！
またムチャクチャな事をォーっ！！！
ムリですよ
ムリムリムリ
あいつは魔獣のような奴なんですよ！？」
ルフィ「そんなのわかんないだろ」
コビー「ムリ」
ソラ「そんなに、揉めて
ロロノア・ゾロってのは、何者なんだ」
コビー「ロロノア・ゾロ
【海賊狩りのゾロ】という異名をもつ
恐ろしい奴です。
血に飢えた野犬のように
賞金首をかぎまわり、海をさすらう男だと
人の姿をかりた【魔獣】だと、人はいいます」

ルフィ「ふーん」
ソラ「それは恐ろしいね～
　仲間にするかは船長に任すよ」
コビー「だから、仲間にしようだなんて
　バカな考えは、すてた方が・・・」
ルフィ「でも、別に、おれは仲間にって
　決めた訳じゃなくて
　もし、いい奴だったら・・・」
コビー「悪い奴だから、捕まってるんですよ！！」
ソラ「悪い奴だけが、捕まるんじゃねぇよ」
コビー「え？」
ルフィ「ししししし」

船に沈黙が落ち。船は進んでいく

|
|
|
|
|
|
|
|

船が進む事、数日
前方に島が見えてきた
あの日からコビーと少しぎこちない

ソラ「あそこが、目的地か？」
コビー「？はい
あそこは目的地
海軍基地の町【シェルズタウン】です」
ルフィ「よし、上陸だ」

俺たちは港に向かった

ルフィ「ついた！！
海軍基地の町っ！！」
コビー「はい！！つきました！！」
ルフィ「お前、すごいな。コビー」
コビー「え？」
ルフィ「ちゃんと、目的地についたよ！」
コビー「あたり前ですよ！海に出る者の

最低限の能力ですよ！
ルフィさんだって、毎度漂流しちゃ
海賊になんてなれませんよ。
せめて航海士を仲間にするとか」
ルフィ「ああ、そうする！！
ソラ、大丈夫か？メシ行こうぜ」
ソラ「久しぶりの地面だ。
揺れないのはいいね～
大丈夫だが、慣れない事はするもんじゃないな」
ルフィ「ソラ、海賊なんだ
慣れろ」
ソラ「了解、船長
飯は先に行ってくれ
武器屋に寄ってから行く」
ルフィ「分かった。先、行ってぞ」

俺はそういって武器屋を探しに歩き出した

――――コビーｓｉｄｅ――――

僕は・・・

ルフィ「ふー
食った食った。
どうしたコビー、
まだメシ残ってぞ
食わないなら、おれがもらうぞ」

コビー「いえ、
ソラさんが、言った事が気になって・・・」
ルフィ「『悪い奴だけが、捕まるんじゃねぇよ』ってことか」
コビー「えぇ、僕は悪い事したら
逮捕されると思っているので・・・」
ルフィ「まあ、いいじゃねえか
いつか、分かるんじゃねえか
その飯もらい」
コビー「？ひどいですよ
ルフィさん」
ルフィ「ししししし
これで、コビーとも
お別れだな！
立派な海兵になれよ！」
コビー「ルフィさん
はい・・・！！ありがとうございます。
ルフィさんも立派な海賊になってください（泣）
いずれは敵同士ですが」
ルフィ「そういや、基地にいるかな
あの・・・ゾロって奴」

『ガタン！！』
ビクビク・・・
ルフィ「・・・・・・？」
コビー「・・・・・・！！！
ここではゾロの名は禁句のようですね・・・」
ルフィ「ふーん」
コビー「さっき張り紙を見たんですけど

ここの基地には
モーガン大佐という人がいて」

『ガタガタアン！！』

コビー「え！！？」
ルフイ「おお
ソラ、遅いな
先に基地行くか」
コビー「いいですか？
ここ離れて」
ルフィ「また戻ってくればいいだし
行こうぜ」
コビー「待ってくださいよ
ルフィさん」

僕はお店の様子を疑問に思いながら
ルフィさんを追い、基地に向かった

――ルフィside――――

ルフィ「これが、海軍基地か
近くて見るとゴッツイなー」
コビー「・・・・・・！！」
ルフィ「いけよ！コビー」
コビー「で・・・でも
まだ、心の準備が・・・！！」
さっきの一件もありますし・・・」
ルフィ「あの塀の上から、中、見ようぜ」
『ぴょん』

コビー「あ！ルフィさん！！」
ルフィ「魔獣はどこかなァ」
コビー「覗いて見える様な
所には、居ませんよ
きっと奥の独房とか」
『スタ』
ルフィ「いや！
なんかいつぞ
向こうに！！」

『タタタタ』

ルフィ「ゾロって奴かも」
コビー「え・・・！！・・・・・・・・・・・・・・・！！！」
ルフィ「あそこからなら
見れそうだ」
コビー「待ってください
僕も、見ます」

『ゴオオオオオ』

ルフィ「ほら、あいつ」
コビー「！！！」
『ドサ』
ルフィ「どうした？」
コビー「く・・・く・・・
黒い手ぬぐいに腹巻！！！
ほ・・・本物だ
本物のロロノア・ゾロです！！！
『ドックン　ドックン！！』

なんて、迫力だろう・・・・！！！
あれが、ゾロ・・・！！！」
『ドン！！』
ルフィ「あれがそうか・・・
あの縄、ほどけば
間単に逃がせるよな
あれじゃあ」
コビー「ば・・・ばかな事、言わないでくださいよ！！！
あんな奴、逃がしたら
町だって無事じゃ済まないし
ルフィさんだって、殺そうとしますよ
あいつは！！！」
ルフィ「大丈夫
おれ、強いから」
コビー「もう、この人は（半泣）」
ゾロ「おい、お前ら
目障りだ、失せろ」
コビー「・・・！！！
ルフィさん、あんな奴
仲間にしたら命がいくつあっても
『ガタッ』
ん？」
『ピョコ』
リカ「しーっ」
『キョロキョロ
シュルショル
スタ
コソコソ』
コビー「・・・！

ああ、危ない
ルフィさん、止めて下さいよっ！！
あの子、殺されちゃいますよ！！」
ルフィ「自分でやれよ
そうしたいなら」
ゾロ「？
オイ、何だ、てめェ」
リカ「おなか空いてでしょ
私、おにぎり作ってきたの」
ゾロ「殺されてェのか・・・
消えなチビ！！」
リカ「お兄ちゃん、
ずっと何も食べて、ないんでしょ
はい
私、はじめて、だけど
一生懸命、作ったから・・・」
ゾロ「・・・
腹なんか、へっちゃいねェ！！
それ持って、とっとと消えろ！！」
リカ「だけど・・・」
ゾロ「いらねェっつってたろ！！帰れ！！
踏み殺すぞ、ガキ！！」
『ガシャン・・・！』
ヘルメッポ「イジメは、いかんねェ
意外と元気そうじゃねェか
ロロノア・ゾロ」
ルフィ「また、変なのがでたな」
コビー「あれは、きっと海軍のえらい人ですよ・・・
よかった、あの子、殺されなくて・・・」
ゾロ「チッ

七光りのバカ息子が・・・」
ヘルメッポ「バカ？
こら調子にのるなよ
おれの親父は、かのモーガン大佐だぞ！！
おや、おいしそうなおにぎりだねェ」
『ヒョイ』
リカ「あ！だめっ！！」
『パク』
ヘルメッポ「ぷへェっ
まずうっ！！く・・・くそ甘ェ！！
砂糖が入ってるぞ、こりゃ
塩だろうがふつう
おにぎりには塩っ！！」
リカ「だ・・・だって
甘い方がおいしいと思って・・・！！」
『パシッ！！』
ヘリメッポ「こんなもん『ゲシ』
食えるか『ゲシ』
バケッ！！『ゲシ』」
リカ「ああっ！！やめてよ！！やめて！！
食べられなくなっちゃう！！」
コビー「ひ・・・ひどい
あの子が、せっかく作ったのに・・・！」
ヘルメッポ「大丈夫！！
アリならなんとか、食ってくれるさ
ひえっひえっひえっ
ひえっひえっ」
リカ「ああ・・・！！・・・・・・・・！！
『ボロボロ・・・』
・・・・・ひどいよ！！！わたし

・・・一生懸命、つったのに・・・・！！！」
ヘルメッポ「ああ、お前、この張り紙、見なかったのか
〔罪人に肩入れし物
死刑に処す〕
〔海軍大佐モーガン〕」
リカ「えっ！！！」
ヘルメッポ「ひえっひえっひえっ
ガキでも、親父の怖さは知ってるようだな」
ルフィ「親父？」
コビー「じゃあ、あれはモーガン大佐の息子」
ヘルメッポ「おい
このガキ、投げ捨てろ」
海兵「・・・・・・は？」
ヘルメッポ「塀の外へ、投げ飛ばせっつったんだよ！！
おれの命令が聞けねェのか！！！
親父に言うぞ！！！」
海兵「は・・・はい、只今っ！！」
リカ「あ・・・あ・・・
いや」
海兵「すまん、譲ちゃん
体を丸めて」
リカ「！！？
いやあああ！！！」
ルフィ「・・・・・・・・！！」
『ドサッ・・・！』
リカ「あ・・・ありがとう」
コビー「大丈夫ですか、ルフィさん
きみ・・・ケガはないかい！？
なんてひどい奴なんだ・・」
ゾロ「貴様」

ヘルメッポ「ひえっひえっひえっ
ひえっひえっ
しかし、しぶとく生きてやがるな
てめェは！」
ゾロ「ああ・・・ちゃんと、
一ヶ月生きのびてやるさ」
ヘルメッポ「まァ、せいぜいがんばってね
ひえっひえっひえっ
ひえっひえっ」
ゾロ「あと十日だからな」
ヘルメッポ「それまで、生きていられたらね
ひえっひえっひえっ
ひえっひえっ」
コビー「なんて、ひどい事するんでしょうね
ルフィさん、えっ居ない」
ゾロ「・・・！！」
ルフィ「お前、悪い奴、なんだってな」
ゾロ「てめェ、まだ居たのか」
ルフィ「こんな所で晒し者になって
おまえ、ホントに強いのか？」
ゾロ「余計なお世話だ！！！」
ルフィ「ふーん
おれだったら、三日で餓死するな、きっと」
ゾロ「おれとお前とじゃ
気力が違うんだ
おれは必ず生きのびてみせる
絶対に！！！」
ルフィ「へー、物好きな奴」
ゾロ「ちょっと待て」
ルフィ「ん？」

ゾロ「それ・・・取ってくれねェか」
ルフィ「食うのかよ　これ
もう、ほとんど泥のかたまりだぞ？
いくら、腹減っててもこりゃあ・・・・」
ゾロ「ガタガタ　ぬかすな
黙って、食わせろ
落ちたの全部だ！！
『ア　パク』
・・・・・・・・・！！『バリッ』
・・・・・・・・・・・・！！！『バリッ』
・・・・・・！！『モグッ！！』
『ゴ・・・ゴックン』！！！」
ルフィ「だから　言ったろ
死にてぇのか？」
ゾロ「ゴブッ・・・あ・・・あのガキに
伝えてくれねェか・・・！！！」
ルフィ「？何を」
ゾロ「〔うまかった〕
〔ごちそうさまでした〕
・・・ってよ」
ルフィ「！・・・はは
コビー　行くぞ」
コビー「待ってくださいよ
ルフィさん」

時間が少し戻り

――ソラｓｉｄｅ――――

武器屋はどこかね
おお、あった・・・あった
『カランカラン』
店主「いらっしゃい
どのような物をお探しで」
ソラ「今日はどんなのが、
有るか見に来ただけだ
気にしないでくれ」
店主「へい」

なんかいい武器はと
やっぱり、古いタイプが多いな
ここら辺は、適当に解析して

使えそうな物から、訳が分からない物まで
一通り、触れると
『数打ちの刀
材質は鋼
刃渡り７５ｃｍ
厚さ７ｍｍ
重さ９００ｇ
新品
数打ちだが、出来はそこそこ
刀は使い手に全てがかかっている
達人はなまくらでも斬れるが
逆に素人が業物を使っても何も斬れない

全ては君の腕次第』
この世界にも刀があるのか
今の俺じゃ、無理だな
これは
『フリントロック・ピストル
材質は鉄
全長３５ｃｍ
重さ７５０ｇ
新品
火打石で着火させる
連射は出来ず、ブレも激しい
精密射撃は難しい』
ソラ「親父、銃はこれが最新か」
店主「いや、
うちであつかっているのは
それが最新だが
海軍には、少し大型ですが連射出来るのありますぜ
聞いた話では【南の海（サウス・ブルー）】には、
小型の連射銃が作られた、らしいですぜ」
ソラ「貴重な情報をありがとう」

銃はかなり初期の方だな
リボルバーなら・・・
『ピカッ』
ソラ「これは・・・！！！」
店主「なんかありましたか」
ソラ「いや、なんでもない
今日は、これで、帰りますは」
店主「ヘイ、またの御贔屓を」

俺は店を出て、路地裏に入り
出てきでて、海軍基地に向かった
俺の手には、あるものが・・・握られていた。

――ゾロｓｉｄｅ――――

あいつらが出ていった
少し経ち、また変な奴が立っていた

ソラ「お前がロロノア・ゾロか」
ゾロ「だったら、何だって
いうんだよ」
ソラ「いや、別に、
俺が来る前、誰か、来たか？」
ゾロ「ああ、変な麦わら帽子の奴がきたが
お前の連れか？手綱はちゃんと握っとけ」
ソラ「あいつは、手綱じゃ、制御できねぇよ
なに、話したんだ」
ゾロ「軽い世間話だ」
ソラ「そうか
お前がなんで捕まったか、
なんとなく、射しが付いた
じゃあな」
ゾロ「どこへ行く
そっちは・・・！！
死にてェのか」
ソラ「ちょっと、大将を見にね」

そういって、不思議な男は、去っていた

あいつが、どうなろうが、知ったこっちゃねェ
あと十日、生きのびる、あいつとの〔約束〕の為に

――――コビーｓｉｄｅ――――

ぼくたちは、リカちゃんの話を聞いている

リカ「あのお兄ちゃんは、悪い事してないもの
町のみんなは、怖がってたけど
捕まったのだって、私を助けるために
モーガン大佐の息子が、飼ってた狼を
斬っちゃったからなの！
それまでは、野放しで狼が
町を歩き回って、みんな
すごく困ってて・・・！！」

ルフィ「じゃあ、ゾロが捕まった、理由ってのは・・・
アイツの飼い狼を斬ったってだけの事なのか」

コビー「そうか・・・！！それもそうですよね
彼の気性の恐ろしさは、さておき
賞金首を狙う事が罪になるわけ
ありませんからね」

？だからあの時、ソラさんはあの言葉を・・・
『悪い奴だけが、捕まるんじゃねぇよ』

リカ「悪いのは、モーガン親子よ

少しでも、逆らえば
すぐ死刑で、みんなびくびくしてるの」
ヘルメッポ「ひえっひえっひえっ
ひえっひえっ！！
頭が高ェっつってんだろ
親父に言うぞ！！！」
ルフィ「！」
ヘルメッポ「ロロノア・ゾロみてェに磔になりてェか！？
三日後には、ゾロの奴を公開処刑にする！！
みせしめだ、楽しみに待ってろ！！」
ルフィ「三日後？
一ヶ月の約束はどうしたんだ！！」
ヘルメッポ「なにィ？誰だ貴様、どこで聞いた
ズが高ェな
『ぶぷーーーーーっ！！』
そんな約束、ギャグに決まってるだろっ！！
それを本気する奴も、また魔獣的にバカだけど
ひえっひえっ・・・」
『ドカッ！！』
ルフィ「！！！！」
町人「キャーーーーーっ」

気づいたら、ルフィさんがヘルメッポを殴っていた

――？？ｓｉｄｅ――――

海軍本部　本館

モーガン大佐「おれは偉い」
『ドーーーン』

海兵「はっ
なにしろ　大佐でありますから！！
モーガン大佐」
モーガン大佐「その割りには、近ごろ町民共の
［貢ぎ］が、少ねェんじゃねェか？」
海兵「はっ！その・・・大佐への納金に関しましては
なにぶん、町人達の懐にも限度がありまして・・・」
モーガン大佐「懐が問題じゃねェ・・・
要はおれへの敬服度だ！！」
『バン！』
ヘルメッポ「親父っ！！！」
モーガン大佐「どうした
ヘルメッポ、騒々しいぞ」
ヘルメッポ「ブッ殺してほしい奴が、いるんだよ！！！」
海兵「大佐！
屋上の準備ができました」
モーガン大佐「分かった
今。向かう」
海兵「はっ！」
ヘルメッポ「待ってくれよ、親父」
そして部屋に誰も居なくなった

――ゾロｓｉｄｅ――――

『相変わらず、弱いはね　ゾロ』
〔約束〕したんだ
おれはこんな所で死ぬ訳にはいけねェんだ

ゾロ「・・・・!?
ん・・・・?
また、お前か、暇な奴だ」
ルフィ「おれはルフィ!
縄、解いてやるから
仲間になってくれ!!」
ゾロ「なんだと」
ルフィ「おれは一緒に海賊になる、
仲間を探してるんだ」
ゾロ「断る!!
自分から悪党に成り下がろってのか
苦労なっこって」
ルフィ「海賊のどこが悪い」
ゾロ「海賊なんて、外道だ。だれがなるか」
ルフィ「別にいいじゃんか
もともと、お前　悪い賞金稼ぎって
言われてるんだから」
ゾロ「世間がどう言おうと勝手だが
おれは後悔するような事はやっちゃいねェ
なにがなんでも生き延びて
おれはおれの成し遂げたい事を成し遂げる」
ルフィ「あぁ・・そうか
でも、おれはお前を仲間にするって決めた」
ゾロ「勝手に決まるな」
ルフィ「お前、刀使うんだってな」
ゾロ「ああ・・・だが。あのバカ息子が持ってっちまったよ」
ルフィ「おれが取り返してくるよ」
ゾロ「なに?」
ルフィ「だから、刀が欲しけりゃ

仲間になれ」
ゾロ「性質悪りいぞ　てめェ」
『タッタッタッタッ』
ゾロ「あいつ・・・一人で基地に乗り込むつもりか
あ・・・!?バカ、基地は反対だ、そっちじゃねェ」
ルフィ「えっ!!」
ゾロ「ふう」
ルフィ「ゴムゴムの・・・ロケット」
ゾロ「いったいあいつは何者なんだ」

――――??side――――

海兵「1・・・2・・・
1・・・2・・・」
モーガン大佐「よーーーし
そこで止めろ!!
そのまま立たせるんだ!!」
ヘルメッポ「親父っ!!何で仕返しに、いかねェんだ!!
おれを殴りやがったんだぜ!!?
親父にも殴られた事のない
おれの顔を!!!」
モーガン大佐「・・・・・・・・・・!おれが、今まで、なぜ
お前を殴らなかったかわかるか?」
ヘルメッポ「・・・・・・・・・
そりゃあ、親父にとっておれが・・・」
モーガン大佐「そうお前が、殴る価値もねェ
ウスラバカ息子だったからよ!!!」
『ドゴォ!』
ヘルメッポ「ほがァ!!??」

モーガン大佐「なんで　おれが貴様のケンカの
尻むぐいしねきゃなんねェんだ
てめェが、俺の偉さを利用するのかまわんが
おれが手を下すのは、おれに逆らった奴だけだ！！！
『グイ』
勘違いするなよ
てめェが偉いんじゃねェ！！
偉いのは、てめェの親父！！
つまり、おれだ」
ヘルメッポ「・・・・・・！」
モーガン大佐「そういや　ネズミが一匹
おれの磔所に侵入したらしいな」
ヘルメッポ「へ・・・？あ・・・あのチビの事かい・・・
あいつなら、おれが・・・」
モーガン大佐「ちゃんと殺して来たんだろうな」
ヘルメッポ「は？いや・・・だって殺すって・・・
ありゃ、まだホントガキだしよ・・・
自分で何したかなんて・・・」
モーガン大佐「おい、お前、町に行って殺して来い」
海軍中尉「え・・・」
モーガン大佐「どんなガキでも、おれの命令に
そむけば、反逆者だ！！」
海軍中尉「そ・・・そんな、大佐！相手は、まだ幼い少女です！！
・・・・・・・・・・！！たとえ大佐の命令でも、私には・
・・！！」
モーガン大佐「できねェってのか？
お前は海軍中尉だろう？
中尉は大佐より偉くねェよな・・・・・・ん？」
海軍中尉「は・・・はい」
モーガン大佐「だったら貴様はおれにたてつく権利はない！！

おれが殺れと言ったら殺れ！！」
海軍中尉「・・・・・・で！！できません・・・！！！」
モーガン大佐「てめェも反逆者だ！！！」
『ザクッ！！』
海軍中尉「うあああああ」
ヘルメッポ「・・・・・・！！なにもそこまで・・・・・・！！」
海兵「ちゅ・・・中尉っ！！」
モーガン大佐「まァいい・・・町民共のみせしめに
後で直々に町へ行くとしよう
おれは海兵として、この腕っぷしで大佐まだ登りつめた
いいか・・・世の中、称号が全てだ！！！
この基地での最高位の大佐であるこのおれが
最高に優れた人間であるという事だ・・・・・！！！
偉い人間のやる事は全て正しい！！！
違うかてめェら・・・！？」
海兵「はっ！！その通りであります　大佐！！」
モーガン大佐「みろ！！これが、おれの権力の象徴だ！！！
長い年月をかけて今日完成したばかりの
おれの念願の像だ！！
さァ早く像を起こせ！！
この基地の頂点におれの偉さを示すんだ！！！」
海兵「わっせ　わっせ」
モーガン大佐「引け！！引け！！」
『ガチン！！』
海兵「はっ！！」
モーガン大佐「オイ　ちょっと待て・・・！！！
今・・・ぶつけやがったな！？」
海兵「も・・・申し訳ありません

不注意でした」
モーガン大佐「貴様　おれがこの像の完成を
どれだけ待ち望んだと思ってやがる・・・・！！
早々に傷つけやがって・・・！！」
海兵「申し訳ありません大佐！！
責任持って修繕を・・・！！」
モーガン大佐「この像はおれ自身だと思え・・・・！！
キズ一本、汚れの一つでさえ
大佐への反逆だと思え！！！
『ひゅんっ』
思い知れ！！！！」
海兵「うあああああ」
ルフィ「うわっ　飛びすぎっ」
海兵「何だ　ありゃ　下から何か飛んで来・・・・」
『ガッ！！　グイッ・・・！！』
ルフィ「止まった！」
海兵「！は！！？
うあああああ」
『バカッ！！ヒューーー！！ドカン！！』
ルフィ「ご・・・ごめんさい」
モーガン大佐「あいつを捕まえろ
おれが殺す！！！！！」
海兵「は・・・はっ！！只今！！」
ヘルメッポ「親父こいつ！！
おれを殴った奴だよ！！
だから行ったろ！！
ろくな奴じゃねェんだよ！！」
『ガシッ！』
ルフィ「お前　探してたんだよ」
ヘルメッポ「はあああああ

離せ　貴様　親父助けてェ！！！」
海兵「ほ・・・本館へ侵入したぞ」
ヘルメッポ「ああっ」
海兵「追えェ！！」
海兵「大佐！！碟所に誰かいます！！」
モーガン大佐「何ィ・・・！！？
次から次へ反逆者か！！！
みな殺しにしてやる・・・！！！
狙撃兵・・・！！あの反逆者を撃ち殺せ！！」
海兵「は・・・はいっ！！只今！！」
モーガン大佐「よく狙え！！
いまだ・・・撃てィ！！」
『バン』
狙撃兵「うっ！？」
？？「そいつを殺されたら、困るからな」
モ^ガン大佐「・・・！！！誰だ貴様
どこから、きやがった
貴様も反逆者か！！」
？？「貴様に抵抗してるから、反逆者だな
まあ、てめぇに従う気はねぇ」
モーガン大佐「じゃあ、貴様も死んでいけ
鉄砲構え！！！」
海兵「はっ！！」
モーガン大佐「これで逃げ道はねェ
殺してやるよ」
？？「それは、御免被る
じゃあな」
『シュン』
海兵「お・・・屋上から飛び降りt！！
・・・！！！壁に剣が刺さっています

それを足場に下りていきます」
モーガン大佐「くそ、おれ達も磔所に向かう」
コビー「ええ！？ルフィさんが基地の中へ？
またムチャクチャな事を・・・！！」
ゾロ「本当だぜ　何者なんだ　あいつは
おい、いいのか！おれに手を貸せば
てめェが殺されるぞ」
コビー「あなたに捕まる理由はない筈です！！
ぼくはこんな海軍、見てられない！！
ぼくはきっと正しい海兵になるんです！！
ルフィさんが海賊王になるように！！」
ゾロ「何？か・・・海賊王だと・・・！？
意味わかって言ってるのか」
コビー「えへへへ・・・ぼくも驚きましたけど
だけど本気なんです　彼はそういう人なんです！！」
？？「コビー、そんな所で笑ってる
狙撃されるぞ」
ゾロ「！！」
コビー「ソラさん、いままで、どこにいたんですか」
ソラ「海軍基地の屋上に」
コビー「な・・・なんて所に・・・！！」
ソラ「いいじゃあねぇか
おかげでお前の狙撃、止められたんだから」
コビー「ぼく、殺される所だったんですか・・・！！
ありがとうございます！！！」
ゾロ「お前はあの時の・・・
本当に行ってたのか」
ソラ「まだ生きてたのか　お前
早く縄、解けよコビー

海兵が来るぞ」
ゾロ「お前ら、やめろ　おれは逃げる訳にはいかねェだ
あと十日は」
コビー「あなたは明日、処刑されるんですよ」
ゾロ「なに？」
ソラ「やはりな」
コビー「ヘルメッポは始めから貴方との約束を
守る気なんてなかったんだ
だから、ルフィさんは怒ってヘルメッポを殴ったんです」
ゾロ「あいつが・・・」
コビー「ルフィさんとソラさんは海軍に追われる身
あなたに海賊になれとはいいません
だけど、お願いです、ルフィさん達に力を貸してください」
ソラ「時間がない　コビー、退けろ　ロープを切る」
モーガン大佐「そこまでだ　おれさまへの反逆の罪で
お前たち、三人を今ここで処刑する」
ソラ「これはやべな、時間稼ぎもきついぜ
それ、コビー　そのナイフでロープ切れ」
モーガン大佐「ロロノア・ゾロ・・・
てめェの評判はきいていたがこのおれを甘くみるなよ
貴様の強さなどおれの権力の前にはカス同然だ・・・
！！！
構えろ！！」
ソラ「チッ」
『バン！バン！バン！！』
海兵「ぐぁ」
モーガン大佐「なにしてやがる
こっちも撃て！！」
コビー「だめだ死ぬ・・・！！」
『ドン！！

ズドドド『

ゾロ「・・・・・・・・・お前っ！！！！」

コビー「ルフィさんっ！！！！」

ソラ「やっと来たか！！」

モーガン大佐「麦わら・・・・」

『びょーん』

ルフィ「効かーん！！！！！」

『どびょん！！』

海兵「うおおおおおっ！！！！」

ルフィ「んなっはっはっはっは！！！！」

ゾロ「てめェ・・・！！！！一体　何者なんだ！！！！」

ルフィ「おれは海賊王になる男だ！！！！

ほら！お前の刀はどれだ？

わかんねェから、三本持ってきちゃった」

ゾロ「三本ともおれのさ・・・

おれは三刀流なんでね・・・」

ソラ「三刀流なんて始めてきいた」

ルフィ「ここでおれと一緒に、海軍と戦えば

政府にたてつく悪党だ

このまま死ぬのと、どっちがいい？」

ゾロ「てめェは悪魔の息子かよ・・・まァいい・・・

ここでくたばるくらいなら

なってやろうじゃねェか・・・海賊に！！！！」

ルフィ「やったァ！！仲間になってくれんのかよ！！」

ゾロ「わかったら、さっさと、この縄を解け！！」

ソラ「そうだぜ、コビーにナイフ渡したから、それで切れ」

ルフィ「わかった」

海兵「あいつ・・・何だ・・・！！」

海兵「銃弾を弾き返しやがった・・・！！！」

モーガン大佐「ありゃ　だたの人間じゃねェぞ・・・

あのガキ・・・！！！噂に聞く
あの〔悪魔の実シリーズ〕の
何かを食いやがったに違いねェ」
海兵「・・・あの海の秘宝を！！！
まさか・・・じゃあ、今の能力は悪魔の・・・！！！
大佐　あいつ、ゾロの縄を」
モーガン大佐「解かせるな！！！銃が駄目なら斬り殺せ！！」
海兵「お・・・うおおおおお」
ルフィ「ナイフはどこだ？」
ゾロ「おい！！グズグズするな！！」
ソラ「仕方ないな」
『バン！バン！バン！！』
海兵「うわ」
モーガン大佐「怯むな、迎え！！」
コビー「・・・・ん・・・
・・・は・・・気を失ってたのか
・・・・・一体・・・
うわっ
ル・・・ルフィさんソラさんゾロさん危ないっ！！！」
ルフィ「コビー、起きたのか
ナイフどこだ？」
コビー「ナイフは確かここに
はいルフィさん」
ソラ「早くしてくれ、そろそろ抜かれそうだ」
ルフィ「よし、斬った」
ゾロ「バカ野朗、刀をよこせ！！」
モーガン大佐「おれに逆らう奴ァ全員死刑だァ！！！」
ソラ「抜かれた、気おつけろルフィ」
コビー「・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

『ガキン！！』

海兵「！！！」

モーガン大佐「ロ・・・・ロロノア・ゾロ・・・・！！！！」

コビー「・・・・・・・・・・！！」

ルフィ「おーーーっかっこいいっ！！」

ゾロ「てめェらじっとしてろよ

動くと斬るぜ」

海兵「ひい・・・・！！・・・・・・・・！！！！」

（怖すぎる・・・・・・・・・・！！！！）

ゾロ「海賊にはなってやるよ・・・・約束だ！！

海軍と一戦やるからには

おれもはれて悪党ってわけだ・・・

だが　おれには野望がある！！！」

ルフィ「！」

ソラ「野望ねぇ」

ゾロ「世界一の剣豪になる事だ！！！！

こうなったらもう名前の浄不浄も言ってられねェ！！

悪名だろうが　なんだろうが　おれの名を世界中に轟かせてやる！！！

さそったのはてめェだ！！野望を断念する様な事があったら

その時は腹切っておれをわびろ！！！」

ルフィ「いいねえ　世界一の剣豪！！

海賊王の仲間なら、それくらいなって貰わないと

おれが困る！！！」

ソラ「世界一の剣豪ねぇ

刀の使い方を知りたいな」

ゾロ「ケッ言うね」

モーガン大佐「何ボサッとしてやがる！！！

とっととそいつらを始末しろ！！！」

ルフィ「しゃがめ、ゾロ！！」
海兵「！！！！」
ゾロ「！」
ルフィ「ゴムゴムの・・・鞭（ムチ）！！！！！」
『ズバァン！！』
海兵「！！！！！」
モーガン大佐「！！？」
コビー「や・・・やった！！
すごいっ！！！！」
ゾロ「てめェは一体・・・！！」
ルフィ「おれはゴム人間だ！！！！」
海兵「ゴ・・・ゴ・・・ゴム人間！！？」
海兵「た・・・大佐！！あいつら・・・！！
我々の手にはおえません！！」
モーガン大佐「・・・・・・！」
海兵「ムチャムチャだ！！
あんなやつら・・・！！」
海兵「それに・・・ロロノア・ゾロと戦えるわけがない・・・！！」
モーガン大佐「大佐命令だ　今・・・弱音を吐いた奴ァ・・・
頭、撃って自害しろ
このおれに部下に弱卒は要らん！！！
命令だ！！！」
海兵「・・・・・・！！」
『ガチャ・・・』
ルフィ／ゾロ「！！！」
ゾロ「どうかしてるぜ　この軍隊は・・・！！！」
『バン！バン！バン！！』
海兵「うっ！！？」
『バタッ！バタッ！バタッ！！』
ゾロ「！！！」

ソラ「人に命じられて命を捨てるな！！！！」
ルフィ「ししししし
ナイス、ソラ」
ルフィ「おれは海軍の敵だぞ
死刑にしてみろよ！！！」
『ドゴッ！！』
モーガン大佐「！！」
コビー「ルフィさん　こんな海軍つぶしっちゃえェ！！！！」
モーガン大佐「身分も称号もねェやつらは・・・！！
このおれに逆らう権利すらない事を覚えとけ
おれは海軍大佐　斧手のモーガンだ！！！！」
ルフィ「おれはルフィ！よろしくっ」
モーガン大佐「死ね」
ルフィ「！」
『ズパッ・・・・・！！』
コビー「！！！　んな！！　なんて切れ味なんだっ！！！！」
『ぐっ・・・・！　ドカン！』
モーガン大佐「ぐは！！！
・・・・・・！！」
海兵「た・・・大佐が」
モーガン大佐「小僧
『グアッ』
死刑だ！！！」
『ドゴォ！！』
『ひゅ・・・』
モーガン大佐「！」
ルフィ「死ぬかっ」
モーガン大佐「！？
『ズドッ！！』
！！！」

コビー「つ・・・強すぎる・・・！！！」
海兵「モ・・・モーガン大佐が一方的に・・・・！！」
ルフィ「なにが海軍だ
　　『グイッ・・・』
　　コビーの夢をブチ壊しやがって・・・・」
モーガン大佐「！！！」
ゾロ「・・・・・・・・・・・・・」
ヘルメッポ「待てェ！！！」
　　『ガン！』
ヘルメッポ「待てっつってんだろ　アホか　このォ！！！
　　こいつの命が惜しけりゃ　動くじゃねェ！！！
　　ちょっとでも動いたら撃つぞ！！！」
海兵「ヘルメッポ様・・・・・・・・・・・・・・・！！」
コビー「ルフィさん！！ぼくは！！ルフィさんの邪魔をしたくえりません！！
　　死んでも！！！」
ルフィ「ああ・・・知ってるよ」
　　『ガチャ・・・』
ソラ「俺の存在を忘れてないか
　　コビーを撃った瞬間　お前も死ぬぜ」
ヘルメッポ「うぅぅぅ」
コビー「ルフィさん　後ろ！！！」
モーガン大佐「バカ息子、そのまま、構えてろ！！」
ルフィ「ゴムゴムの・・・銃（ピストル）！！！」
ヘルメッポ「！？　親父　早くそいつを・・・
　　ぶほっ！！！」
ルフィ「ナイス
　　『バン！　ドズー・・ン！！』
　　ゾロ　ソラ」
ゾロ「お安い御用だ　船長（キャプテン）」

ソラ「おれはああいう人種が嫌いでねぇ」
海兵「た・・・大佐が負けた・・・！！！」
海兵「モーガン大佐が倒れた！！！」
『どーーーーん』
ゾロ「まだ　おれ達を捕えてェ奴ァ名乗り出ろ！」
海兵「・・・・・・・・・！
やったァーーーーーっ！！
解放された！！！
モーガンの支配が終わったァ！！！
海軍バンザーイ！！！」
ルフィ「なんだ　大佐やられて喜んでやんの」
コビー「・・・・・・みんな　モーガンが怖かっただけなんだ・・・！！」
『ドサァ・・・！！！』
ルフィ「ゾロ！？」
コビー「ゾロさん！！」
ソラ「空腹が限界になったな」

ゾロ「はァ食った・・・！！！
　さすがに三週間も食わねェと極限だった」
ルフィ「あれ　もうおしまいか　お前」
ゾロ「おめェは何でおれより食が進んでんだよ」
コビー「すいません　なんか・・・僕までごちそうに・・・」
リリカ「いいのよ！町が救われたんですもの！」
リカ「やっぱり　お兄ちゃん　すごかったのね！」
ルフィ「ああ　すごいんだ
　もっとすごくなるぞ　おれは！」
ゾロ「それで、ここからどこへ向かうつもりなんだ？」
ルフィ「【偉大なる航路（グランドライン）】へ向かおう」
ソラ「そんな事、言ってたな」
コビー「！！！？んまっ
　また、無茶苦茶な！！！
　まだ三人なのに【偉大なる航路（グランドライン）】へ入るなんて！！
　死にに行く様なもんです！！！
　わかってるんですか！？
　あの場所は世界中から最も屈強な海賊達が集まってき来てるんです！！」
ゾロ「まァ　どの道【ワンピース】を目指すからには
　その航路をたどるしかねェんだ・・・いいだろう」
ソラ「行ってみないと分からないからな・・・いいんじゃねぇ」
コビー「いいってあなたたちまで　ソラさん！！ゾロさん！！？」

ゾロ「別に　お前は行かねェんだろ・・・・・・？」
コビー「い・・・いか・・・行かないけど！！心配なんですよ！！
　いけませんか！！？あなた達の心配しちゃいけませんか！
！！」
ゾロ「いや・・・それは」
コビー「ルフィさん　ぼくらは・・・！！つきあいは短いけど
　友達ですよね！！！」
ルフィ「ああ　別れちゃうけどな　ずっと友達だ」
コビー「ぼくは・・・小さい頃から　ろくに友達なんていなくて・・
・
　ましてや　僕のために戦ってくれる人なんて、絶対いません
んでした
　何より　ぼくが戦おうとしなかったから・・・！！
　だけど　あなた達、三人には・・・・・・！！
　自分の信念に生きる事を教わりました！！！」
ルフィ「だから　おれは【偉大なる航路（グランドライン）】へ行くんだよ」
ゾロ「まァそうなるな」
ソラ「俺はただお前らに付いて行くぞ」
コビー「あっそうか
　いや！！違いますよ　だから僕は今　行く事が無謀だって・
・・」
ゾロ「それより　お前は大丈夫なのかよ」
コビー「え？」
ゾロ「雑用でも　アルビダの海賊船に二年居たのは事実なんだろ
　海軍の情報力をみくびるな
　その素性が知れたら入隊なんてできねぇぜ」
海軍中佐「失礼！
　君らが海賊だというのは、本当かね・・・」
ルフィ「そうだね　一人、仲間も増えた事だし
　じゃ今から海賊って事にしよう！」

海軍中佐「反逆者としてだが我々の基地とこの町を実質
救って貰った事には一同、感謝している
しかし君らが海賊だとわかった以上
海軍の名において黙っている訳にはいかない
即刻　この町を立ち去ってもらおう
せめてもの義理を通し本部への連絡はさける」
町人「おいっ！！何だ　そのいいぐさは！！
てめェらだってモーガンにゃ抑えつけられてビクビクしてた
じゃねェか！！
我々の恩人だぞ！！」
ルフィ「じゃ・・・行くか　おばちゃん　ごちそうさま」
ソラ「ごちそうさん　うまかったよ」
ゾロ「・・・・・・・・・・」
コビー「ルフィさん・・・」
リカ「もう行っちゃうの？お兄ちゃん達」
『スーー・・・！』
コビー「！・・・・・・！！」
海軍中佐「君も仲間じゃないのか？」
コビー「え！ぼく・・・・・・！！ぼくは・・・・・・・！！
（ルフィ／別れちゃうけどな・・・ずっと友達だ）
ぼくは彼らの・・・仲間じゃありません！！！」
海軍中佐「・・・・・・・・・！待ちたまえ　君達！！本当かね？」
ルフィ「・・・・・・おれ　こいつが今まで
何やってたか知ってるよ」
コビー「！ルフィさん・・・・・・・・・！？
（まさか・・・・・・！！）」
ルフィ「どの辺の島だかわかんねェけど
こーんな太った女の海賊がいてさァ
アルビダっつったかな」
コビー「ちょ

（海賊船に居た事がバレたら・・・海軍に入れなくなっちゃう！！！）
やめて下さい・・・」
海軍中佐「・・・・・・・・・」
ルフィ「何だかイカついおばさんなんだけど
二年間もこいつそこで・・・」
コビー「（やめて下さいよ！！やめて下さいよ・・・・・・！！！）
やめて下さいよ！！！！！」
『バキッ！！』
ルフィ「！！？」
海兵「・・・・・・・・・！！」
コビー「・・・・・・・・・！！！」
ゾロ「・・・・・・・・・」
ソラ「ふぅ」
ルフィ「やったな　このヤロォ」
『バキッ！！』
コビー「！！」
ルフィ「このやろ『ドカッ！』
このやろ『ボコ！！』」
海軍中佐「！やめたまえ！！！
これ以上この町で暴動を起こす事は許さんぞ！！！」
ゾロ「おいおいやりすぎだ　そのへんにしてけよ」
ソラ「そうだぞ　それ以上は捕まるぜ」
海軍中佐「君らが仲間じゃない事はよくわかった！！！
今すぐこの町を立ち去りなさい！！！」

――――コビーｓｉｄｅ――――

ソラ「じゃあ、とっとと行こうぜ」

（わざとか・・・！！！僕のために！！！）
コビー「・・・・・・！！！」
（わざと僕にけしかけて・・・！！！殴られて・・・！！！
また・・・！！僕は最後の最後まで）
ゾロ「捕まえるって構わねェんだぜ・・・できるなら」
海兵「ひっ」
（あの人に頼ってしまった！！！）
ソラ「ルフィ　コビーの拳はどうだった」
ルフィ「・・・・・・・・・・・」
ソラ「そうかい・・・」
（何も変わってないじゃないか！！！
ぼくは・・・！！バカか・・・！！？
『スタッ』
ここからはい上がれなきゃ本当にバカだ！！！）
コビー「僕を海軍に入れて下さい！！！
雑用だって、何だって、喜んでやります！！
海兵になるためなら！！！」
（よしやるぞ！！ぼくはやる！！！）
海兵「中佐！私は反対ですよ！悪いがね
私はまだ君を信用しきれない」
コビー「！」
海兵「海賊が海軍のスパイになるという例もある
まずは君の素性を調べて・・・・・・・・」
コビー「・・・・・・・・・・・・・
『どん！』
ばくは！！海軍将校になる男です！！！！」
海軍中佐「・・・・・・・・・・
海軍にやられた同士は数知れない
海軍を甘くみるな
入隊を許可する」

コビー「はいっ　ありがとうございます！！」

――ソラｓｉｄｅ――――

ゾロ「たいしたサル芝居だったな
　おれじゃバレてもおかしくねェぞ」
ソラ「分かってて、付き合ってたと
　思うぜ　あの海兵」
ルフィ「そん時はそん時だ　コビーが何とかすさ　絶対！」
ゾロ「何にしても　いい船出だ
　みんなに嫌われてちゃ
　後、引かなくて海賊らしい」
ルフィ「だははは　そうだな」
ソラ「そうとも限らないぜ」
コビー「ル！ル！」
ルフィ「コビー」
コビー「ルフィさんっ！！！
　ありがとうございました！！！
　この御恩は一生忘れません！！！」
ゾロ「海兵に感謝される海賊なんて聞いた事ねェよ」
ソラ「ほらな」
ルフィ「ししししし！
　また逢おうな！！！コビー！！！！」
海軍中佐「全員敬礼！！」
　『ザッ・・・！！』
コビー「え！？」
　『ワーーーッ』
海軍中佐「いい友達をもったな」
コビー「！はいっ」

海軍中佐「我々の今の敬礼は海軍軍法の規律を犯すものである
よって全員先　一週間メシ抜きだ！！！」
海兵「はっ！！！」
ルフィ「くーーーーっ
行くかァ！！【偉大なる航路（グランドライン）】！！！」

そして俺達は新しい冒険に出た

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1036s/

ONE PIECE　我が正義の為

2011年10月9日22時48分発行